

天理教国際たすけあいネット
通 信 No. 78

発行日：2023年12月15日

発行者：天理教海外部

住 所：〒632-8501 奈良県天理市三島町1番地1

電 話：0743-63-2404

F A X：0743-62-0227

E-Mail：tnet@tenrikyo.or.jp

ホームページ http://kaigai.tenrikyo.or.jp/t_net/

「一れつきょうだい」の実践をこれからも

天理教国際たすけあいネット 副代表 清瀬理弘

2021年3月海外部ヨーロッパ・アフリカ課長の御命を頂くと同時に国際たすけあいネットの副代表の立場をお与え頂きました。コロナ禍で、当たすけあいネットの活動は制限され、本通信もその間休刊していた為、ご挨拶が遅れましたことをお詫び申し上げます。

今から38年前になりますが、私が海外部に入部した当初、東京在住の幼い三兄弟からの手紙が天理時報に掲載されたことがきっかけで「飢えた子供にミルクを」と銘打った募金活動が活発に行われていました。アフリカ課に配属された私は毎日のように多くの信者さんたちから寄せられた「一円玉募金」を受け取っては募金袋へと収めておりました。両手で持ち上げてもずしりと重い募金袋をバイクの荷台に乗せて連日銀行まで運んでいったことが昨日のことのように思い出されます。そういうご縁もあってか、私が初めて訪れる事になったのもケニアという国でした。

この活動は1989年に終息しましたが、その後は国際救援の形について検討がなされ、1996年に現在の国際たすけあいネットが新たに発足しました。今年で発足28年目を迎える当ネットは、発足時に掲げた理念に基づ

いて、本教の海外拠点や国際救援活動に取り組む教内の諸団体と連携を取りつつ、情報収集・発信などを行ってまいりました。近年は、地震、洪水などの自然災害に対して、たすけあいネット基金から緊急支援として義援金を送るなど、世界中の人々の心のたすかりを願って活動を行っております。

世界各地で起こり続ける天災地変や民族紛争に起因する問題はますます大きくなり、地球規模になりつつあります。それに対し、現在それぞれの教区、教会、また個人が信仰活動の一つとして「一れつきょうだい」という理念のもとに、様々な形で国際支援活動を行っていること思います。こうした活動が今後も引き続き、をやの思いに沿って広がっていくことを願っております。

今号では、規制緩和後、現地に赴かれた先生方からのご報告を掲載させていただいております。今後、心新たに、よろづたすけ・世界たすけへの伏せ込みとしての「国際たすけあいネット」活動を進めていきたいと存じますので、益々のご支援・お力添えをお願い申し上げます。

2020年～2023年11月までの天理教国際たすけあいネット基金運用報告

2021年7月 ドイツ西部洪水 支援額：463,250円(3,500ユーロ)

2021年、ドイツ西部にて7月13日からの大雨の影響で14、15日に洪水が発生。ヨーロッパ出張所を通して、被災した精神障碍者のための「命の救済の家」を運営する「社団法人命を救う会」に寄付。

2022年2月 トンガ火山噴火・津波 支援額：1,000,000円

2022年1月15日17時頃(現地時間)トンガの首都ヌクアロファの北約65kmに位置する海底火山「フンガトンガ・フンガハアパイ火山」で大規模な噴火が発生。津波による住宅の倒壊、津波・降灰による飲料水の汚染等、多くの人が被災。天理大学「トンガ王国 災害支援募金」に寄付。

2023年2月 トルコ・シリア地震 支援額：3,000,000円

2023年2月6日前4時17分(現地時間)トルコの南部ガジアンテップ県、シリアとの国境付近でマグニチュード7.8の地震が発生。トルコ赤新月社並びにシリア赤新月社による、トルコ、シリア両国の被災者への救援、復興支援等に活かされるよう、日本赤十字社に寄付。

2023年8月 マウイ島山火事 支援額：2,184,300円(USD15,000)

2023年8月8日(火)未明に、ハワイ州マウイ島のラハイナ地区他、複数の場所で火災発生。募金活動を行っていたハワイ伝道序に寄付。

諭達第四号に心を励まして

URYU代表 小崎 浩司

「コロナ禍」。3年余この言葉に翻弄されて、自分を見失っていました。令和2年(2020年)3月ほとんどの航空機が止まり、ケニアに行く方法がなくなり、この年TUIを卒業した留学生のペレズを3月24日に関西空港へ送り、エミレーツ航空の最終便に乗せるのがやっとでした。

国内では色々なことが制限され、国内の移動もままならなくなり、海外へということは考えられませんでした。鎖国状態になって、出歩くこともできず、農作業をして神饌物を作るのがやっとでした。

今年になって、緊急事態宣言は5月で解除されました。新たなる一步を踏み出さねばという自分自身の気持ちは、保守的というか、保身に埋もれていました。初のコロナ感染者が出た前年に教会長を辞職し、コロナ禍の世の流れに飲み込まれ、ある意味何をやっても制限された自分に終始していました。

ケニアのその後についても、心のどこかに、何とかしなければという思いはありました。身動きがとれずにいる自分が居ました。

そんな中、毎日のおつとめで、諭達第四号を拝読し、諭達冒頭の「全教の心を一つにしたい」という真柱様のお言葉が胸に迫ってきて、深く考えるようになり、「ケニアの教友と心を一つにしなければならない」との思いに至り、急きょ渡航することを決断しました。

今回のケニア行きは5年ぶりです。現地の子ども達に夢を運ぶ事は勿論ですが、それ以上に現地の人々と諭達第四号の共有が大事と、海外部のヨーロッパ・アフリカ課に相談に行き、諭達第四号の講習をするための助言を頂くことができました。

6月23日の午後6時、土砂降りの嵐の中、無事キスム空港に到着。こんなに雨が降るケニアに来たのは初めてでした。

今回のケニア訪問の目的は、ランブグ、キタン



少女達の相談に乗るペレズさん

ボ、ゴトボンドと3ヶ所の小学校訪問。昨年開設したURYU幼稚園の視察。そして最も大事なのが、コロナ後の現地のようぼく、信者との交流がありました。小学校訪問では奨学金の贈呈をし、URYU幼稚園では、揃いのユニフォームと日本のお菓子の詰め合わせを41人の子供達に配りました。

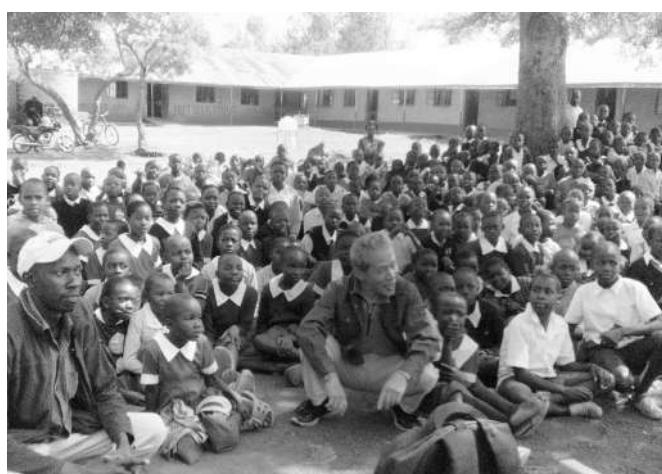
コロナ後の現地の様子ですが、日本よりも落ち着いて見えました。

今回の一番の目的である諭達講習会は、2日に分けて行い、延べ40人ほどが受講してくれました。他、私の滞在中、布教所長のエリックとようぼくのペレズが中心になって、おつとめ練習（鳴り物、ておどり）を、より集う信者に毎日指導してくれました。また、合間を縫って4ヶ所の講社を訪問しておたすけに回りました。

7月1日の月次祭は布教所長を芯に勇んでつとめ、又、タづとめには新たに10人の女子中学生が参拝に来て、ペレズが色々とその子達の相談に乗ってあげていました。その姿にペレズのようぼくとしての自覚を見ることができ、大変嬉しく思いました。

活動最終日、7月2日は50km離れたビクトリア湖畔の漁師一家の講社づとめに向かいました。洪水で広い国道が流され、悪い道を進むことになった為、到着に半日かかりました。さらに、彼らの家も洪水で流された為、新たに小高い丘の上に新居を建築中でした。私は持ち合わせのお金を渡して、励まして帰るしかありませんでした。全然情報がなかったので驚きました。

今回のケニア訪問では、現地の教友としっかりと連絡を取り合い、情報共有していかねばならないと改めて思いました。その上で、にをいがけ、おたすけのできる人を御守護頂けるよう、私自身がしっかりと伏せこんで努めねばならないと感じました。



小学校を訪問した小崎 代表

宮ノ陣ケニアボンド布教所巡教

天理教宮ノ陣分教會長
中隈禎昌

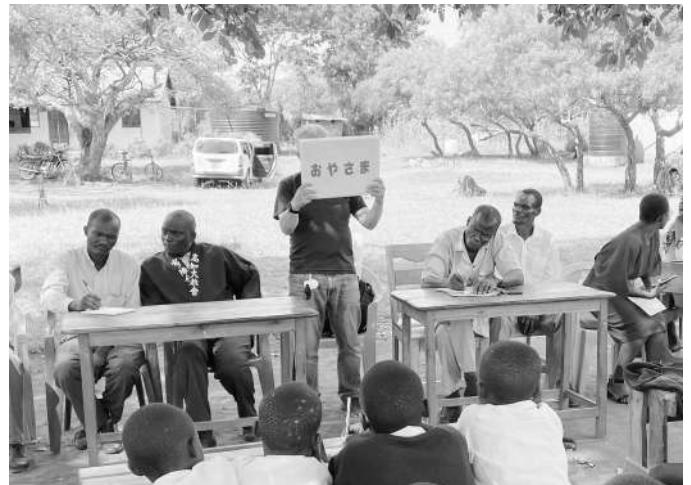
コロナ禍のため、3年9ヶ月ぶりのケニアへの渡航になりましたが、初っ端からトラブルに見舞われました。今までナイロビ到着時に入国のビザ申請と入国手続きと一緒にした方がスピーディーでしたので、今回もそのつもりでいたところ、5月31日福岡空港で搭乗手続きをしようとしたら、「今は日本で事前にビザの取得をしていないとダメになっています」と言われて、やもなく帰宅。6月3日出発に変更してビザの申請を行い、やっと前日夜に取得できて、3日に福岡より出発しました。

4日夕方布教所に到着し、久しぶりの再会を喜び合い、先ず諭達第四号を拝読し真柱様の思召を伝えると共に、高知大教会の教祖140年祭活動方針も拝読し大教会長様の思いも、所長家族とタブづめに参拝していた信者に伝えさせて頂きました。

更に、足を運べなかつた間に出来直した布教所長の母親とRARYU講元の父親、並びに講社の役員の母親の3人を布教所の祖靈舎に合祀をさせて頂きました。

5日と6日にはBARKAWAGA小学校とOIKO小学校とRARYU小学校に行かせて頂き、例年同様全校生徒や教師・父兄・地域の役員などに教理のお取次ぎ(今回はおやさまの紙芝居をさせて頂き、ひながたを説かせて頂きました)、そしておさづけのお取り次ぎ(3校で合計106人)、奨学金とジョイアスボールさんから委託されたサッカーボールの授与をさせて頂き、大変喜んで頂きました。

また、6日の午前中は、布教所のある居住区の行政トップと懇談会がありました。その懇談会で彼らから、日本に行って色々陳情をしたいので仲介をしてほしいとの要請がありました。毎月、行政と一緒に天理教信者が街中で清掃ひのきしんをさせて頂いており、パイプを太くしていることもあり、いろいろな面で優遇を受けてきました。今までに



紙芝居を用いて、おやさまのお話のお取次ぎ

布教所所在地として0.4Ha(約1,200坪)と農業用地として1.4Ha(約4,200坪)を頂いています。また、行政のトップクラスの人たちはおちばがえりをしたことがあり、おさづけの理の拝戴もして頂いています。勿論、こちらからも行政にいろいろサポートをさせて頂いており、以前には消防車を寄贈させて頂きました。そんな訳でWin-Winの関係を保っています。彼らは自費もしくは公費で来日が可能ですので、来日予定が決まつたら仲介をしてあげようと約束をさせて頂きました。このような高山布教も海外布教には必要不可欠なのではないかと考えています。

日程が短縮してしまったので、とにかく休むことを惜しんで信者宅にも足を運びました。所長の実家では、コロナ禍の最中に母親が出直しており、その後講社はどうなっているのかと危惧しておりましたが、隣家等に住む親戚一党が、毎日の御供やおつとめ、そして、講社祭(毎月13日)も滞ることなくつとめてくれていました。今後も引き続き、つとめさせて頂きますと力強くお誓いをしてくれましたので、安心致しました。

その他、数軒の信者宅や新たな地域に、にをいかげおたすけにも出させて頂き、人々にケニアの大地を歩き回って勇んでつとめさせて頂きました。

皆様もご存じのように、イスラム教徒のためのモスク(礼拝堂)が国際空港内にありますが、私は幾世紀か後には、天理教徒のためのおつとめ場所がご守護頂けるよう、以前から経由地の空港内で朝夕のおつとめと十二下りをつとめており、今回は更に路傍講演もさせて頂きました。皆様方も実践して頂けませんか?この動きが広まれば幾世紀後にはおつとめ場所がご守護頂けると思います。頑張りましょう!!



おさづけを取り次ぐ中隈会長

再開された、若者の成長に寄与する活動—国際参加プロジェクト報告—

天理大学国際交流センター室 足立正文

天理大学の「建学の精神」に基づく「他者への献身」を国際的な舞台で実践していく教育プロジェクトとして、2001年のインドを皮切りに始まった「国際参加プロジェクト(International Participation Program、以下 IPP)」。以来、ほぼ年一回のペースで、フィリピン、中国、インドネシア、カンボジア、ネパールを舞台に継続されてきましたが、コロナ禍の影響から中止を余儀なくされました。

しかしながら、本年2月、実に5年ぶりに現地活動が再開され、2月11日から27日の17日間の日程で、参加学生23名、引率教職員3名の26名が参加し、タイ国内のマハーサーラカーム、チェンマイ、バンコクの3つの都市・地域及びその周辺での諸活動を実施。2週間に亘る充実の日々を終えた同月27日、全員揃って無事に帰国することができました。

20年以上に及ぶIPPの現地活動地は、今回初めて実施したタイを含むアジア地域の7ヶ国を数え、それぞれの活動地において、大地震で被災した人々への救援活動や小学校などでの教育支援活動に従事し、大きな成果を挙げるとともに、その地に住まう人々の心にも掛け替えのない記憶を残すなど、学内外からも高い評価を受けてきました。これも偏に、各活動地で当プロジェクトの参加学生を寛大な心で受け入れ、お世話を下さった天理教海外部の海外拠点の皆様、更には、各地の教会・布教所に繋がる信者の皆様の温かいご支援・ご協力のおかげです。この紙面をお借りして、心より御礼を申し上げます。

5年ぶりに実施したIPPの現地活動をデザインするに際して留意した点は、近年に活動を展開してきたカンボジア、ネパールでの活動が、主に小学校での教育支援活動に限られていたことから、新たに「国際協力」に相応しい活動を取り入れ、実施することでした。

その一つが、マハーサーラカーム県に所在する過疎の村「プラブー村」において、自給自足を目指し、村おこしのための様々な事業を展開しているNPO「タイバーン・センター」での活動でした。日本とは異なる生活環境に身を置きながら、同村の村人たちと一体となって、同センター



チャオプラヤー川清掃ボランティア活動の様子

の主導している諸活動に取り組み、支援する。更に村内の各家庭へのホームステイや托鉢を体験するなど、村人たちと協働する喜びを味わうことができました。

今一つは、バンコク都環境局との協働ボランティア活動として、チャオプラヤー川の清掃ボランティア活動を実施したことでした。この活動の実現に尽力したのは、元都環境局長のウーラット氏と天理教タイ出張所の野口信也所長で、両氏が知己の仲であったことから、都環境局の多大なるサポートを得て実現に至りました。IPP一行は、当日13隻のボートに分乗し、環境局の清掃員と協働して川に浮かぶ大量の浮草やプラスチックゴミなどを回収し、爽やかな汗を流しました。この活動は、初の試みであり、やり甲斐と大きな意義があったとの感想が聞かれました。

もう一つの留意点は、タイにおける本学の協定校の学生たちとの共同ボランティア活動でした。マハーサーラカーム県プラブー村での4泊5日の活動では、マハーサーラカーム大学で日本語を専攻している9名のタイ人学生が、タイバーン・センターと共に寄宿しながら、全ての活動に参加し、通訳などの重要な役割を担ってくれました。同様に、チェンマイでも、チェンマイ・ラーチャパット大学で日本語を学ぶ学生10名が小学校、中高校の訪問・交流に同行し、通訳などの役を務めてくれました。各活動地では、全日程を終えての別れ際、涙しながらIPPの学生たちとハグし、別れを惜しむ姿を目の当たりにして、協定校として本来あるべき「交流」ができ、実に意義深い活動であると感じた瞬間でした。

上記以外にも、従来からの主活動であった各地の小・中学校での教育支援活動に精力的に取り組み、各学校の生徒・教職員一人ひとりから感謝の言葉をいただきました。

長いようで短かった17日の活動期間、参加学生たちは、日々成長し、様々なことを学び、これまで経験したことがないような沢山の体験を通して、人間力が身についていったように感じます。全員無事に帰国できただけでも、丸儲け。それにプラスして、一人ひとりが経験したことは、彼ら/彼女らのこれから的人生に必ずや役立つと確信した、この度のIPPでした。



托鉢体験

「いざ、世界だすけ」

天理教済和分教會長 山崎栄慈

昨年の秋季大祭にて、真柱様が数年ぶりに肉声で諭達第四号を御発布下さいました。神苑はシンと静まり返り、あの瞬間の感激。教祖140年祭活動に励もうと皆が心に誓った瞬間でした。

諭達第四号の冒頭に、「親神様は、旬刻限の到来とともに、教祖をやしろとして表にお現れになり、世界一れつをたすけるため、陽気ぐらしへのたすけ一条の道を創められた。」とあります。たすけ一条の道を歩み、陽気ぐらし世界実現を目指すことが私達の目標です。世界に足を向けられなかった4年間でしたが、5月にコロナは5類扱いとなるとのことだったので、私と山崎拓人（長男）、そして山崎敬充・和星分教會長の3名は、年祭活動の旬の風をケニアとウガンダのよふぼく信者へ届けるべく、5月中旬より約3週間現地を訪問して参りました。

この度お世話になった滞在先は、ウガンダ首都カンパラの浦神布教所（高安部属南浦所属）、北東地方マナファ県のジョフリー（助扶理）宅。私と拓人はケニアへ移動してナイロビでオミル宅。キスム地方のカニケラ布教所（敷島部属宇龍所属）を参拝。周辺村内へおさづけの取次に回りました。エリック所長さん達が国境の町ブシアまで送って下さり、ブシアからカンパラヘマタトゥ（乗合タクシー）で移動。翌日、カンパラからカルシング県チカビア村にある真誠ウガンダ布教所（高安部属済和所属）で活動しました。また、帰国の際にはエンテベ村にある東アフリカ布教所（那美岐部属男能富所属）を参拝に寄らせて貰いました。

各所で皆が報告してくれたことは、ケニアでは



訪問先でおさづけを取り次ぐ

9ヶ月のロックダウンがありコロナ関連死が大勢いたこと。都市部はIT化が進んだこと。在ケニア邦人が激減して今は100人切っているだろうとのこと。ケニアもウガンダも高速道路などがかなり整備されていたこと。日本の物価とケニア・ウガンダの物価が全く同じこと。以前は100円が150ソリングだったのが、今は100ソリングと等価だったこと。ウガンダもほぼ同様の貨幣価値でした。日本の経済力が落ちていることを如実に体感し、正直、恐ろしくなりました。

今回、現地の皆様とコロナ禍でお互いに大変だったことを労い、しかし、それも終わった今、教祖140年祭の旬に教祖にお喜び頂けるよう精一杯にをいがけ、おたすけに励むことを約束しました。

また、次回の訪問の時には神様を祀るということになったり、にをいがけに励んで1つの拠点になることを目指してくれたり、布教所は教会となれるようにと、それぞれが心の成人に伴う形の成人を目指す心を定めてくれました。

一方、長男の拓人は、行く先々でおさづけに明け暮れ、大勢の方々にお取次してくれました。今回、彼をケニア、ウガンダに連れて行きましたが、父から始まったこのアフリカの道が、親から子、子から孫へと親子3世代に渡って繋がっていく姿を現地の皆様が目の当たりにすることになりました、それを大変喜んで下さいました。

私達は大きなことはできませんが、細く永く陽気ぐらし世界実現の為にこの活動を続ける決意を改めて致しました。



布教所周辺を神名流し

国際たすけあいネット基金会計報告（2022 年度）

立教 186 年 3 月 31 日現在

収支計算	収入合計	¥41,808,964
	支出合計	¥3,215,000
	残高	¥38,593,964

収入

前年度繰越金	¥38,874,379
一般寄託金	¥2,907,172
海外部募金	¥27,084
利息	¥329
計	¥41,808,964

支出

山梨教区井戸掘り支援	¥215,000
トルコ・シリア地震災害支援	¥3,000,000
計	¥3,215,000

※ 天理教海外部報 5 月号（699 号）にて既報

